

氏名	宮城 幹夫
学位の種類	博士(学術)
学位記番号	甲第 176号
学位授与年月日	2014年3月26日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	The Protestant Theologies of Social Justice with an Eschatological Perspective : Christians in Okinawa during the U. S. Administration (1945-1972) (終末信仰を内在する社会正義神学 - 米国統治下に於ける沖縄のプロテスタント基督者 (1945~1972))
論文審査委員	主査 教授 森本 あんり 副査 献学60周年 M. ウィリアム スティール 記念教授 副査 教授 菊池 秀明 副査 教授 大西 直樹

論文内容の要旨

本論文は、アメリカ統治下における沖縄のプロテスタント・キリスト教が生み出した神学思想を取り上げ、その終末論的かつ社会正義志向的な性格を明らかにしようとするものである。

論文はまず、沖縄が歴史的におかれてきた社会政治的な状況を15世紀の琉球王国時代から振り返り、薩摩藩、明治政府、アメリカ統治、さらには祖国復帰後も続く日米二重の桎梏に至るまで、繰り返し主権を侵害され続けてきた経緯を通史的にあとづけている。このような歴史的背景は、時の権力者への面従とは別に、内実においては常に一定の独立性と非関与性を保つ、という沖縄人の独特な精神風土を培うこととなった。明治以降の天皇制や国体思想への組み入れも、限定的な成功を収めることができたにすぎない。これらに対し、人々の精神的な支柱として実質的に機能してきたのは、一族門中を中心とする沖縄古来の祖先崇拜である。論文では、この祖先崇拜は此岸的な生活の困窮から彼岸的な救済の祈願へと人々の関心を振り向ける役割を果たし、これがやがてキリスト教の終末論的な希望理解を受容する素地を提供した、とされている。

「沖縄の基督者」というとき、著者は人口の1%から3%を占めるといわれる沖縄のカトリック・プロテスタントの基督教徒だけでなく、4万人のアメリカ軍関係者とその家族に
いるキリスト教徒をも含めている。論文では特にその中から、沖縄キリスト教団、沖縄聖
公会、沖縄バプテスト連盟、そしてセヴンスデー・アドヴェンティスト教団という4つの
主要教派が選ばれ、それらに属する沖縄人とアメリカ人の信条や思想、意見表明の行動に
焦点を当てた上で、それぞれが土地収用問題、米兵による強姦事件、ライ療養所問題とい
う沖縄史における3つの問題局面にどのような対応を示したかが分析の対象とされている。
この対応は、社会的な不正義に対する抗議や批判の表明と、その不正義の犠牲となった人々
へのいたわりやケア治療とに大別される。

こうした通史的な概観から、以下のことが明らかにされた。まず、社会正義への関心や
変革への動機づけは、15世紀以来の国家的な従属の歴史から生まれることはなかった。外
来権力への服従を繰り返してきた沖縄に、みずからの主権を獲得する運動や意志が生まれ
るためには、いくつかの精神的な転換が必要であった。本論文はその転換点として、ま
ずは皮肉にも沖縄を蹂躪し続けてきた日本国家の存在を挙げる。長く沖縄を支配してきた
本土日本は、敗戦によりアメリカに占領されるが、その占領軍の文化価値として民主主義
や国民主権や平和思想を受け入れた戦後日本は、新憲法を制定しこれを旗印に掲げて新生
国家となった。ところが、沖縄はその戦後日本の新生にも加わることができず置き去りに
されたまま、新憲法に象徴されるその輝きと希望に羨望を抱き続けたのである。当時の進
歩的な沖縄人キリスト者にとり、祖国復帰とはすなわち新生日本のこの希望に加わるこ
とであった。著者によれば、沖縄は長い精神的な準備の期間を経て、この時はじめて自主
独立の社会正義と平和思想を目指す動機と基盤を与えられることになったのである。

1950年代にこうした日本の希望を沖縄に伝える役目を果たしたのは、無教会の指導者で
東京大学総長となった矢内原忠雄である。矢内原は、アメリカ軍の沖縄政策を批判し、バ
ビロン捕囚から帰還するユダヤ民族の聖書記事に託して本土復帰の希望を掲げ、沖縄の
人々を鼓舞した。60年代のリーダーとしては、沖縄から米国政府の発給する旅券を携えて
本土へ留学し、東京神学大学と国際基督教大学に学んだ平良修が取り上げられる。牧師と
なった平良は、1966年のアンガー高等弁務官の就任式に際して「これが最後の弁務官と
なるように」と祈り、米国執政者の憤激を買いつつも沖縄人の精神的な自覚を促した。他
にも、沖縄に派遣されたアメリカ人宣教師らは、米国紙を通して自国の占領政策の非人道性
を非難し抗議を表明している。本論文は、これら先駆者たちの後押しを得て人々が人権と
尊厳を守る社会正義への志向性と自覚を形成していった過程を明確に示している。

論文審査結果の要旨

宮城幹夫氏の博士論文最終口頭試問は、日時を学内公示の上、審査委員 4 名の出席の他に 2 名の陪席者を得て、2014 年 1 月 15 日 13 時 20 分より 14 時 45 分まで、国際基督教大学教育研究棟 257 号室において行われた。

最初に、委員会は執筆者自身がこの論文の主旨を 1 文で総括することを求めた。宮城氏はこれを「沖縄のプロテスタント基督者は、米国統治下ばかりでなく、長い苦難の歴史を通して、社会正義への希望と終末論的な視野を堅持し続けた」ということであると総括した。

審査委員からは、まず沖縄キリスト教の関係者とその諸発言が一次資料から時系列的に蒐集され、ていねいに提示されていることが大きく評価された。これまでは、個々の政治家の発言などが断片的に紹介されることはあっても、それらが沖縄史の文脈の中でどのように位置づけられるかを体系的に論じた研究は存在しない。資料のなかには、アメリカ軍の公式報道やニュース記事、宣教師や教会集会の報告ばかりでなく、執筆者個人とも親交のある平良修氏や金城重明氏の直接発言なども記録されており、本論文はまず歴史的な証言集として貴重な資料的価値を有していることが確認された。

中間審査においては、沖縄の窮状が同じようにアメリカ軍基地を有する韓国など他の国々のそれとどのように比較されるべきかを論じることと、沖縄が被害者であるばかりでなく加害者としての役割を担わされている可能性を調べること、という 2 点の改善要求が出されていた。最終審査においては、前者についてなお不十分さが残るものの、後者については沖縄が朝鮮戦争、冷戦時代、そしてヴェトナム戦争と、アメリカ軍の前哨基地として常に重要な戦略的意義を有してきたことが明らかにされており、適切であると評価された。

論文はまた、その執筆初期段階において、平良修牧師の絶対平和主義をラインホルド・ニーバーの神学的現実主義との関連において批判的に検討することを目的としていたが、執筆の過程でその対比軸は必ずしも明確にならないことが指摘され、平和主義や非平和主義というレッテルを越えた即事的な歴史理解を探求することとなった。この点においても、論文全体の構成が再考され、個々の事象が神学的な解釈ばかりでなく歴史的な通観のもとに位置づけ直されていることが評価された。

沖縄の精神風土は、かりにこれを統一的に語ることができると仮定した場合、どの程度戦後アメリカ軍の占領による影響を被っているか、という質問には、当時の占領政策がグアムやハワイの場合と異なり日本語を公用語として残したため、ほとんど実質的な影響を受けなかった、という解釈が示された。アメリカ軍基地におけるキリスト教の実践形態については、敷地内で超教派的な礼拝がもたれているものの、各教派の信徒はその無性格さに飽きたらず、基地の外へ出てそれぞれ独自に礼拝所を組織することが多かったようであ

る。にもかかわらず、彼らの礼拝はあくまでも英語を中心としたもので、在来の沖縄キリスト者が自然に参加できるような礼拝ではなかったため、アメリカ人キリスト者との実質的な交流や接触はほとんど見られない、ということであった。

口頭試問におけるもっとも批判的な問いは、本論文の中核をなす「終末論的視点」の意味とその社会正義との連関を問う主査からのものであった。冒頭の説明によれば、沖縄のキリスト者は終末論的な視点を一貫して堅持した、ということの論証的な提示が本論文の主旨であった。だが本論文では、度重なる米兵による強姦事件に対しては、複数箇所ですべて「このような視点が失われていた」ことが明記されている。「終末論的視点」は、沖縄の近世史が如実に物語のごとく、彼岸的な諦念に終始した場合には、社会正義への希望や変革への実践的行動を挫く結果をもたらす。したがって、酷悪な犯罪を目のあたりにした者にとっては、むしろ終末論的な視点をもたずに現実変革を求める意思を強くすることの方が適切なのではないか。この問いに対して執筆者は、人々の対応が不完全であることを認めた上で、悲惨な事件や歴史の被害者本人たちにとり、尊厳の回復はけっして単なる水平次元での「社会正義」では満たされることがなく、それを越えた終末論的な希望によってのみ得られる、ということを強調した。この意味において、終末論的な視点は地上の倫理的要請を捌けず、かえってその深化をもたらす。沖縄のプロテスタント基督者は、終末論的な希望と現世的な倫理とのかかる弁証法的な緊張関係を常に意識して内在化する宿命にある、と言わねばならない。論文主査と審査委員一同は、この説明を十分なものとして受け止めた。

本論文は、執筆内容を特にアメリカの良識ある人々に届けたいという著者の強い意思により、英語での執筆となっている。沖縄、占領アメリカ軍、基地問題、キリスト教神学、社会正義、平和主義、終末論的視点、などといった鍵語を含む論文は、英語圏の読者層に訴える力があり、今後の出版の可能性も大きい。ただし、英語表現や文章力については、学位論文の執筆としては許容される水準であっても、学術出版に要求される水準に達しているとは言い難い。出版を希望する場合には、かなりの修文が必要とされるであろう。

以上の所見を総合し、審査委員会は本論文が本学の要求する博士論文としての学術的水準を満たすものと認められる、との結論に達した。病と年齢による負担を克服して基礎資料を丹念に渉猟し、海外の学問的な関心からしても有意義と認められ得る博士論文へとまとめ、これを英語で完成させた執筆者の努力を多としたい。